

第4話 豊臣氏の滅亡

家康が理不尽な難題をなげかけて、ついに豊臣氏に兵を挙げさせる。

大阪冬の陣、その和睦の時に更にまた悪知恵を働かせて、再び兵を挙げさせる。

大阪夏の陣、秀頼らが自刃して豊臣氏が滅びる。

豊臣氏の空頼み

幕府がすでに江戸に開けて、豊臣氏の旧臣も皆家康の支配を受けることになったのみならず、豊臣秀頼もまた1個の大名に過ぎなくなってしまうが、しかし、豊臣氏のほうでは、少しも家康に服従などしている気はしていなかった。よしんば家康が将軍になったとはいえ、それは要するに一時のことで、やがて秀頼が成長して関白ともなれば、再び天下の政権は豊臣氏の手に戻って来るものと考えていた。

秀忠の将軍襲職（職をつぐ）

ところが、慶長10年4月16日、家康は将軍職を、僅かに2年2ヶ月在職しただけで、子の秀忠に譲った。この時、家康は64才でしたが、まだまだ元気で、身体も、頭脳も、少しも衰えてはいなかった。その点で隠居などする必要は全くなかった。何か他に理由があったに違いないというので、普通には、自分の生きていうちに秀忠に将軍としての威望を備えさせて、十分に政務にならせる為であったとされる。

なるほど、それも1つの理由ではあったろう。しかしもっと大事な事はこれによって、徳川氏の政権が、秀頼の成長する迄というような1時期のものではなくて、永久に子孫に伝えて行くものであることを天下に知らせると共に、豊臣氏に時代の推移を自覚させて、政権の回復などという及びもつかない妄想はこれを断念させようとしたのでしよう。

家康の大阪威圧

その証拠とも見るべきは、秀忠が征夷大將軍に任ぜられて、正二位内大臣に昇る四日前の4月12日に、秀頼は右大臣に進んでいた。その官位からいえば、むしろ秀頼のほうが上であったにも拘わらず、秀忠が将軍となった翌5月10日に家康は、京都の高台院（秀吉の夫人、即ち北政所）に、秀頼に秀忠の将軍になったのを賀すために京都に上るようと、言わせた。



高台院夫人（北政所）

これは明らかに、豊臣氏と徳川氏との位置が転倒したことを豊臣氏が甘んじて承認するかどうかを探ろうとしたものだった。その時、家康も秀忠も、共に上京して、伏見にいたが、（しかも、大阪方を威圧するため十万騎の兵を率いていた）もしこの時、秀頼が自ら伏見に行き、秀忠の将軍宣下を賀すれば即ち豊臣氏は徳川氏に従う1大名と化したことを自ら承認したことになるのです。

第4話 豊臣氏の滅亡

よどぎみ げきふん 淀君の激憤

どうして、大阪方がそんな事を甘んじてすることがあろう。家康が將軍となる4日前、即ち慶長8年2月8日には自ら大阪に来て秀頼に年賀の礼を述べたほどでありながら、將軍となるや否や、忽ち態度を一変して、その後はこちらから使者を出しても答礼の使者をすらよこさなくなったのをさえ大阪の君臣は憤っていたのに、況して家康の子の秀忠のためになど、苟くも屈辱を受ける筈がなかった。わけでも、秀頼の母の淀君は涙を流して怒って、「太閤の子の秀頼が、なぜそんなことをしなければならぬのか？ 若し達てそうしなければならぬというなら、先づ秀頼を殺して自分も自害する」とまで言ったということです。

こうして、大阪方は断然とこれを拒んだのです。

いもん 家康の大阪慰問

すると、世間でも今にも戦争が始まって、100,000騎の関東軍が大阪を攻撃するように騒いだが、事実は全くちがって現れた。家康は、もともと探りを入れただけのことで、おどかしが無効だと分かると、すぐに態度を変えた。彼はこの時14才であった第7子の忠輝を新將軍の名代として大阪にやって、秀頼を慰問させた。今にわかに淀君を怒らせるのは、まだまだ太閤恩顧の諸将が少なからず生きているので不得策だと考えたからです。それとも知らずに淀君は忽ち安心して、関東に対して大いに威を張り得たような気がしたが、何をか料らん、実にこの時こそ豊臣氏の滅ぼされる事が決まっていたのです。

たいど 家康の豊臣氏に対する態度

という仔細はこうです。初め家康は將軍になった時から、大阪の処分を考えてはいたが、必ずしもこれを滅ぼそうとは思っていなかったらしい。もし豊臣氏が徳川氏の配下の1大名たるに甘んじたらば、これをそのまま存続させるつもりであったらしい。家康は自分が將軍となったすぐ其の後に、孫の千姫を(まだ7才で、秀頼も11才にしかならないのに)大阪に送って秀頼にめあわせたが、これは1つは、かねての秀吉との約束を履行して、大阪方を安心させると共に、ひとつは、これによって両家の親しみを増して、平和に服従させられるものなら、そうしたいと思った為でもあったらしい。

それで、若し豊臣氏のほうでその気になれば、今度は、秀頼に取っては舅の秀忠が將軍となったので、伏見に行ってこれを賀すのは全く当然の事だったので。少なくとも家康は、そういう風に思わせようと仕向けたのです。

ところが、豊臣氏は屈服しようとはしなかった。淀君を始め大阪の君臣は、ますます家康の不信を憤って、どこまでも家康に対抗しようとした。

とうめつさく 家康の大阪討滅策

そこで、当然の結果が家康の大阪討滅の決心となったのです。どうしても服従させることが出来なければ、これを討って滅ぼすより外に方法がないからです。けれども、老獪な家康のことですから、容易にこれを表に出すようなことはしなかった。彼は却って慰問の使いを出して、一先づ淀君らを宥めてお

第4話 豊臣氏の滅亡

いて、さて後に、徐に大阪討滅の策を立てることとしたのです。

大阪城が天下の名城であることは、すでに読者も承知の通りです。城中にはまた金穀の貯えが豊かでした。その上、太閤恩顧の大名もまだ少なからず生きている。いよいよ討滅と決心した以上は、これらの邪魔になるものをうまく除いて、なるべく勞せずして功を取るようにしなければならない。

外様大名の疲弊

そこで家康は、先づ太閤恩顧の諸大名を懐柔して、次第に豊臣氏から遠ざけた上に、彼等の財産を減らして、徳川氏に反抗する資力の無いようにしようと、頻りに方々の城の普請を始めて、その工事を彼等に引き受けさせた。

伏見城、二条城、江戸城、駿府の城などは、將軍の居城もしくは持城であり、或いは家康の隠居城であるので、まだよいとしても、近江の大津城、膳所（大津）の城、彦根の城、長浜城、丹波の龜山城のような譜代大名を置く城までも、豊臣氏の旧臣である外様大名に其の工事を引き受けさせた。まことに横暴な話です。

福島正則の愚痴

慶長15年正月、家康が子の義直を尾張に封じた時に、その居城の名古屋城を、豊臣方の大名26人に命じて築かせたが、このころには、さすがの諸大名も、すでに度々の城普請に全く疲弊して、頗る迷惑を感じていたということです。

福島正則が池田輝政に愚痴をこぼして、同席の加藤清正に、「そんな不服をいうなら、早速領地に帰って、籠城する覚悟がなければならない。さもないならば、とやこう言わずに、工事をする外はあるまい」とたしなめられたという話なども伝えられている。

しかし、彼等は、自分の城は幕府の堅い禁制のために、修理することすらもできなかったのです。

豊臣氏の寺社造営

家康は、次には大阪城に蓄えてある金銀を出来るだけ消費させて、豊臣氏の財力を弱めようとした。

しかし、さすがに彼も豊臣氏には城普請を手伝わせるわけにはいかなかったもので、はやくから秀頼母子に勧めて、しきりに寺社を造営させた。

あとで大問題を起こした京都の方広寺の大仏殿も、すでに一度、慶長7年に家康の勧めで再興にかかったのだが、これはその年の12月、ほぼ工事が終わって、銅像の胴体に首を鑄着けようとした時に、誤って



昭和初期の名古屋城
その後、名古屋空襲で焼け落ちました。

第4話 豊臣氏の滅亡

火を失して、(家康の内意を受けて、わざとしたのだろうという説もある。) 折角の銅像も、大仏殿も、焼け失せてしまったので、その再建工事は中止となったのです。

この外、慶長 10 年以前に、豊臣氏が秀吉の冥福を祈るためと、家運の隆昌および秀頼の武運長久を祈るためにと造営したものは、山城の東寺の金堂、講堂、南大門、三宝院の金堂、河内の叡福寺の太子堂、摂津の四天王寺、勝尾寺、近江の石山寺、横川中堂などを始め、外にもまだ少なくなかったが、同 10 年には、山城の相国寺の法堂、鐘楼、三宝院の西大門、摂津の多田院の本堂、中堂、御影堂、中山寺、河内の菅田八幡などがあり、同 11 年には山城の南禅寺の法堂、醍醐の御影堂、五大堂、如意輪堂、楼門、等持院、真正極楽寺、石清水八幡宮、北野の経王堂、摂津の生国魂神社、法安寺、紀伊の安楽寺の塔婆、伊勢の神宮の宇治橋、尾張の熱田神宮などがあるというように、その後もそれからそれへとますます造営を続けて、ついには畿内を始め、本州中部の主な社寺で、豊臣氏の恩沢に浴さないものは殆ど無いという有様になった。

家康が駿府に移る

けれども、豊臣氏の富はまだまだ尽きなかったので、秀頼はますます成長して、朝廷からは秀吉以来の同じ優遇を賜り、公卿および秀吉恩顧の諸大名からは尊崇されている。家康は自分がだんだん年々寄るのを思うと、もはやぐずぐずしてはいられなかった。そこで慶長 12 年 7 月に、先に將軍職を譲った後も大御所として万端の指図をしていた江戸城の西の丸を去って、駿府(今の静岡市)に移った。勿論隠居ということでしたが、その実は、所謂楽隠居の類ではなくて、いよいよここに腰を据えて、豊臣氏を滅ぼす算段に取り掛かったのです。

方広寺大仏殿の造営を促す

彼は翌慶長 13 年に、片桐且元を駿府に呼んで、先年焼け失せたままになっている方広寺の再建、並びに大仏の鑄造を言葉巧みに説き勧めた。そもそもこの大仏というのは、天正 14 年に秀吉が関白にまでなった自分の功業を記念しようとして、奈良の東大寺の大仏に倣って造営したものです。この時は木像でしたが、高さ 16 丈(1丈は 10 尺、約 3m)という巨大なもので、総体に金箔が塗ってあった。従ってこれを安置する大仏殿もまた高さ 20 丈という、すばらしく大きなものでした。落成したのは天正 17 年でしたが、それから 7 年後の慶長元年 7 月 12 日の大地震で、すっかり壊れてしまったのです。

秀吉はこれを再建するつもりでいたが、同 3 年 8 月、まだその志を果たさないうちに薨じたので、さてこそ家康は秀吉の遺志を継ぐようにと秀頼母子に勧め、同 7 年に再興にかからせたのが、前にも述べたように、途中で火を失して中止となったのです。

方広寺の再建とその費用

さて、片桐且元は、駿府から大阪に帰ると、秀頼母子に家康の旨を伝えて、いろいろと相談した。しかし、このころの豊臣氏は、太閤の時代とちがいで、佐渡の金山もなければ、木曾の森林もなく、ただ僅かに摂津、河内、和泉で約六十五万石を領しているだけでした上に、すでに連年の社寺の造営にも金銀を費

第4話 豊臣氏の滅亡

やしていたので、この大工事を仕^し遂^とげることは容易ではなかった。それで、家臣のうちにも、「今の秀頼公にこれをやらせようというのは無理だ、そんなに徳川家で大仏が望みならば自分のほうでやればよい」などといって反対した者もいた。しかしなにしろ、この頃は徳川氏の勢^{すこぶ}が頗^{さか}る盛^へんで、下手に家康の感^{かんじょう}情^{がい}を害^あしでもしたら、それこそどんな目に遭^あわされるかもわからないという気がしたので、先づはしばらく辛^{しんぼう}抱^{ぼう}して、家康のいう通りになって、老年の彼^{ろうねん}がやがて死^いんでから豊臣家の勢^{いきおい}を恢^{かい}復^{ふく}しようと、多くの者はそう考えた。

それで、ついに方広寺の再建は決まって、その翌 14 年正月から諸国に材木を求め始め、同 15 年 6 月に工事を始めた、出来上がったのは同 17 年 3 月でした。大仏殿は、高さ 15 丈、東西 16 丈、南北 17 丈という大きなもので、中に安置した大仏は、銅像で、高さ 6 丈 3 尺、奈良の大仏よりも一丈高かった。何もかも申し分なく立派^{ぼんしょう}に出来^{つく}ていたので、ついでに梵^{ぼんしょう}鐘^{つく}も造^{つく}ることにし、同 19 年 4 月、重さが 17,000 貫（1 貫目は 3.75 kg）という大鐘^{おおがね}を鑄^いた。工事を始めてから 6 年、秀吉が大阪城中に貯^{たくわ}えておいた軍資金^{ほとん}も殆^つど尽^{つい}きて、遂^きには諸大名から寄^き付^ふを受けたり、借^{しゃ}金^{つきん}したりして、漸^{よう}く竣^{しゅん}工^{こう}させた。この時、淀君は妹の秀忠夫人を通じて、徳川家にも助力を請^こうたが、これは家康が反対して、助力しなかったと伝えられている。

それはともかく、この造^{ぞう}営^{えい}のために、豊臣家が支出した金高は、慶長 13 年 10 月から同 17 年正月までの間だけでも、今日(昭和初期)のお金に換算して 50,000,000 円ほどになるということです。大阪の財^{ざい}力^{りょく}を弱^いくしようとした家康の目的は、実に遺^い憾^{かん}なく達^たせられたといえるでしょう。

こうして方広寺が全^{らく}く落成^{せい}すると、大阪方では、家康の承認を得て、慶長 19 年 8 月 3 日に大仏の開眼^{かいげん}供^く養^{よう}の式^{しき}をすることにした。

開眼供養の中止

ところが、思いもかけない事から家康の怒^こりを買^かって、その前日の 8 月 2 日に、---- すでに準備^{じゆんぶ}が悉^{しつ}く出来^いて、招^{しょう}待^{たい}に^{おう}応^{おう}じて集^あまった坊^{ぼう}さんだけでも千人にもなり、近^{きん}国^{こく}からの参^{さん}詣^{けい}人は何^{なん}万^{まん}という数^{かず}にのぼっていたにもかかわらず、---- 俄^にか^わにその式^{しき}を差^さし止^とめられた。1 つは大^{むね}仏^{ふだ}殿^{だん}の棟^{むね}札^さの書^かき方^{かた}が違^{ちが}っているというのと、1 つは鐘^{かね}に彫^ほり付^けた銘^{めい}に不^ふ吉^{きつ}な文^{もん}句^くがあるというのでした。

棟札問題

棟^{むね}札^さは、読^よ者^{しや}もご存^{ぞん}知^ちでしょうが、その建^{けん}築^{ちく}に^お関^{かん}係^{けい}した重^{おも}なる人^{ひと}々の姓^{せい}名^なや、建^{けん}築^{ちく}の年^{ねん}月^{げつ}日^{にち}などを記^しして棟^{むね}木^ぎに打^{うち}付^ける木^ぎの札^さです。その札^さに大^{だい}工^{こう}の棟^{とう}梁^{りやう}の名^なを書^かけなかつたのを、その棟^{とう}梁^{りやう}が式^{しき}に違^{ちが}うと言^いい出^いしたのです。これは、それを書^かかれた照^{しょう}高^{こう}院^{いん}門^{もん}跡^{せき}興^{こう}意^い法^{ぽう}親^{しん}王^{おう}（後^ご陽^{やう}成^{せい}天^{てん}皇^{こう}の弟^{てい}）が、日本でも中国でも、大^{だい}伽^が藍^{らん}の棟^{むね}札^さには大^{だい}工^{こう}の名^なを書^かけないのが例^{れい}であるという意見を明^{めい}らかにされた上に、その責^{せき}任^{にん}を負^おって、照^{しょう}高^{こう}院^{いん}門^{もん}跡^{せき}をお^おやめ^めになつたので、ともかくも事^{こと}なく済^すんだ。

鐘銘問題

しかし、鐘の銘のほうはそうは行^いかなかつた。ますます事^{こと}がこ^こんが^らら^らるばかりでした。そもそ

第4話 豊臣氏の滅亡

もこの銘は、東福寺の長老^{せいこん}静韓の作ったものでしたが、その中に、「国家安康」という句があったのを、家康は、わざと家康の名を切って彼を呪ったものだと言ひ、その下文に、「君臣豊楽、子孫殷昌」とあるのを、

「君、臣、豊楽 = 子孫殷昌」

と読んで、豊臣氏が自らを祝したのだといった。

これだけでさえも、ずいぶん無理なこじつけであるのに、更にこの銘の序に、家康の事を、

「右樸射源朝臣家康」と書き、秀頼の事を「右丞相豊臣朝臣秀頼」

と書いてあったが、

この右樸射も、右丞相も共に右大臣の旧名であることは分かりきっているのもかかわらず、

「右樸射源朝臣家康」は、「右は樸が源朝臣家康を射る」という呪詛で、下の秀頼君臣が

上の家康を射るという意であるといい、

「右丞相豊臣朝臣秀頼」は、「右は亟かに相となる豊臣朝臣秀頼」の意で、これもまた

自らを祝したのだとまで言った。迎もまじめには聞けないような馬鹿馬鹿しい言いがかりでした。

かたぎりかつもと
片桐且元

大阪方では大いに驚いた。わけても供養総奉行の片桐且元は非常に困惑した。この供養の式は、すでに朝廷に奏上して、一切を取り決めて、各法親王方を始め、着座の公卿、その他の諸役人まで、悉くその人がさだめられて、いよいよ明日となっていたのですから、今更これを止めるということは、いかにしても恐れ多い。そこで且元は、「ともかく供養の式は、滞りなく執り行わせて貰いたい。その上は、自分は切腹してなり大御所にお詫びを申すから」と言ったが、駿府から急使となって京都に来た板倉重昌は、「ごもつもの申し條だが、自分は、供養差し止めのお使いを承っただけで、その他のことは存じない」と言って取り合わない。

且元はよんどころなくその趣を奏上して、供養の式は延期のことにした。

すると、家康から重ねて使いが来て、銘文の申し開きのために駿府に来るようにとのことであつたので、且元は銘文の作者である清韓長老と共に駿府に下つた。

せいこんちやうろう べんかい
清韓長老の弁解

ところが、家康は且元らに面会を許さず、本田正純、金地院崇伝らをして、鐘の銘文の中の不審の廉々を糺せた。且元はこれに対して、自分のもとより無学の者で、何事も弁えずに、ただ清韓長老に頼んで、その書いたままを用いたのだが、秀頼君臣において少しも家康を呪詛する心はない由を言ひ、清韓はまたその詰問に応じて、一々条理を尽くして細かに弁解したが、しかし、家康の機嫌は容易に直らなかつた。もとより無理は承知の上でかけた難題でして、その弁解を聞くのが目的ではなかつたからです。

この時、事態の重大な事が大阪にもわかると、さすがの淀君も大いに心配して、大野治長の母の大蔵卿(淀君の乳母)に正栄という尼をつけて駿府に下らせた。

第4話 豊臣氏の滅亡

家康の離間策

家康は2人が着いたと聞くと、すぐその翌日、城中に入れて、快く面会して、「大阪のほうの事は、且元から何もかも聞いている、中には気に入らないこともないではないが、秀頼を大事に思うから、みんな聞き流している」などと機嫌よく、だが且元を疑わせるようなふう語り聞かせて、2人が鐘の銘の事でお詫びに参上した由をいうと、「そんな事は、何も淀殿などが心配するほどの事でもない」と事もなげに言って、折角ここまで来たのだから、江戸にも行って、將軍夫人（淀君の妹）にも逢って帰るがよいと、殊の外に歓待してくれたりしたので、2人は大いに安心もし、喜びもして江戸に下り、秀忠夫婦の機嫌をも伺った上、帰りにまた駿府に寄って大阪に帰った。

家康の難題

ところが、一方、且元に対しては、家康はますます難題を吹きかけた。彼は2人の女が帰途に就いた頃になって、はじめて城中に且元を召し出して、「今度の事は、其のほうが無学で、文句を解しなかったためであることはわしも知っている。それで、これはともかくとして、近来、大阪の関東に対する態度が何かにつけて甚だ穏やかでない。これでは将来のことも気懸かりであるから、この際、両家の間が長く平和に行くような方策を立てるようにしなさい」と言いつけた。

且元の3策

しかし、両家が長く平和に行くような道というのはどんな事なのか、家康が何を望んでいるのか、且元には分からなかったもので、本多正純らにも聞いて見たが、それは要するに貴殿の胸に在ることだとばかりで、一向に取り合わない。しかし、秀頼が日本一の名城にいて、他の大名のように、江戸や駿府に参観しないのを家康は問題にしていることだけは分かったが、といて、これはいづれも大阪の君臣が承知しよう筈のない事なので、ついに、最後の案として、秀頼の母の淀君を、しばらく人質として江戸に住まわせて、一時ともかくも家康の怒りを宥めようと考えた。

それで、これを正純に話してみると、正純は、それが実行されれば、多分、大御所の怒りも解き得られようという意をほのめかした上に、それには急ぎ大阪に帰って、これが実現を取り計られよとの事で、やがて家康からも大阪に帰ってよいとの許しが出た。

ところが、且元は大阪に帰って見て、驚いた。彼よりも先に帰った大蔵卿らが家康に欺かれたとは知らずに、鐘の銘の事など、決して心配するには及ばないとの事でしたと、駿府や江戸で歓待された様子などを語ったために、城中を挙げて喜んで、すっかり安心していただけです。

且元が疑われる

それで、勿論、且元が苦心して立てた意見などは、だれもまともに聴こうとしなかった。且元には二心あって、豊臣氏を他の普通の大名同様、徳川氏の臣下とならすために、家康の意を承けて、淀君を江戸に人質にと企てたものだという風に考えた。いやいや、事実はまた、これが実行されれば、ついには、且元の本意はそうでなかったにせよ、そういう結果になってしまったかもしれないのです。少なくとも、

第4話 豊臣氏の滅亡

家康はそうならしめようとして、^{かつもと}且元に両家和親の策を立てさせたのです。

^{かつもと}且元の^{たいじょう}大阪退城

そうすると、これをそのまま大阪の君臣が容れる筈はなかった。^い淀君も腹を立てて、^{はず}秀頼も腹を立てた。わけても、前々から事毎に^{かつもと}且元と意見を異にしていた^{おおのはるなが}大野治長らは、これを機会に、^{かつもと}且元を不忠者として殺そうと企てた。^{くわだ}彼等は^{かつもと}且元が登城の際に、^{ろうか}廊下においてこれを殺すこととして、其の斬り手まで定めていた。ところが、この^{けいりやく}計略を知らせた者があったので、^{かつもと}且元は病氣と称して登城を断り、^{ことわ}邸の四方、^{ようしよようしよ}要所々々に兵を配って自らを守った。しかし、やがて城中から討手を向けられそうに迄なると、ついに彼は^{きよじょう}居城の^{いぼらき}茨木（摂津国三島郡茨木町、大阪北部）に退いた。

^{まんえつ}家康の満悦

このいざこざが、大阪城内の^{そうじょう}騒擾として京都の所司代（関が原の戦後に設けた役で、鎌倉時代の^{ろくはらたんだい}六波羅探題に当る）^{いたくらかつしげ}板倉勝重から駿府に知らされたのが10月朔日でした。^こ家康は初めから斯うなるようにと仕向けていたので、この知らせを受けると非常に悦んだ。^{よろこ}両家和親の策を立てた^{わしん}且元を城内から追い出したのは、とりもなおさず、^{すなわ}豊臣氏が両家の和親を欲しない証拠であると、即ちこれを名として兵を向けることができるからです。

^{さいじょう}家康父子の西上

これより先、^{せいしよ}家康は大阪を討つべき時が必ず来ると思ったので、この年の9月7日、諸大名から誓書を取って、^{やから}両御所（即ち家康親子）に対して二心のないこと、上意に背く輩（即ち秀頼及び大阪）の相談には与らないこと、定められた^{あづか}法度には決して背かないこと、の三か条を誓わせて、著々と出陣の準備をしていたが、右の知らせを得るや否や、その日に^{しゅつぽ}出馬の觸を出した。いかに彼がこれを待ちあぐねていたかがわかるでしょう。この時、彼は諸大名に出征の準備を命じたが、さすがに^{おんこ}太閤恩顧の諸将には、^{ふくしままさのり}固い誓書を取っておいたにもかかわらず、やはり未だ心がおかれたのか、^{くろだながまさ}福島正則、^{かとうよしあきら}黒田長政、^{はちす}加藤嘉明、^{かいえまさ}蜂須賀家政らには^{ふだい}譜代大名の1部と共に特に江戸の留守居として残らせた。

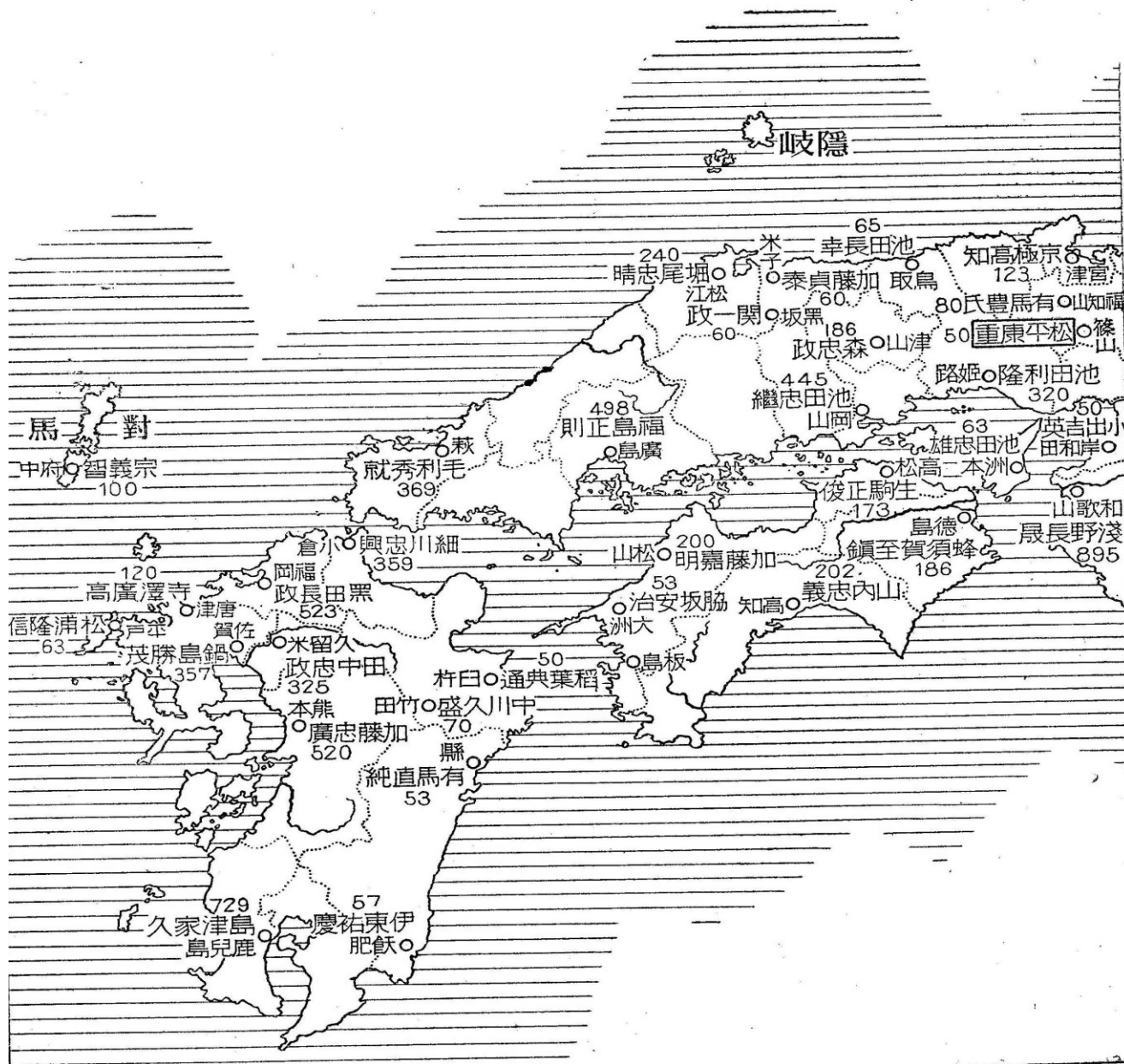
こうして家康は10月11日に自ら軍を率いて駿府を発し、秀忠は江戸で東国の軍の集まるのを待って、同23日にこれを率いて出発した。

^{がた}大阪方の^た立ち遅れ

これに反して大阪方には^{ゆだん}油断があった。^{かつもと}且元を不忠の臣としてこれを誅そうとしたものの、^{ちゆう}家康の真意は、^な大蔵卿のいう通りだと思って安心していたからです。ところが、にわかにか家康自身の出馬が伝えられて来たために、ここに初めて彼の真意が^な大蔵卿の言うようなものでないのを知って、大いにあわてたけれども、今更どうしようもなかった。そこで、いよいよ^{ろうじょう}籠城と決めた。しかし、兵といっても七^な手組に属する^{てぐみ}旗本士の外にはいくらもなかったので、急に諸国の浪人を招くと共に、^{ろうにん}太閤の縁故を説いて諸大名の応援を求めた。

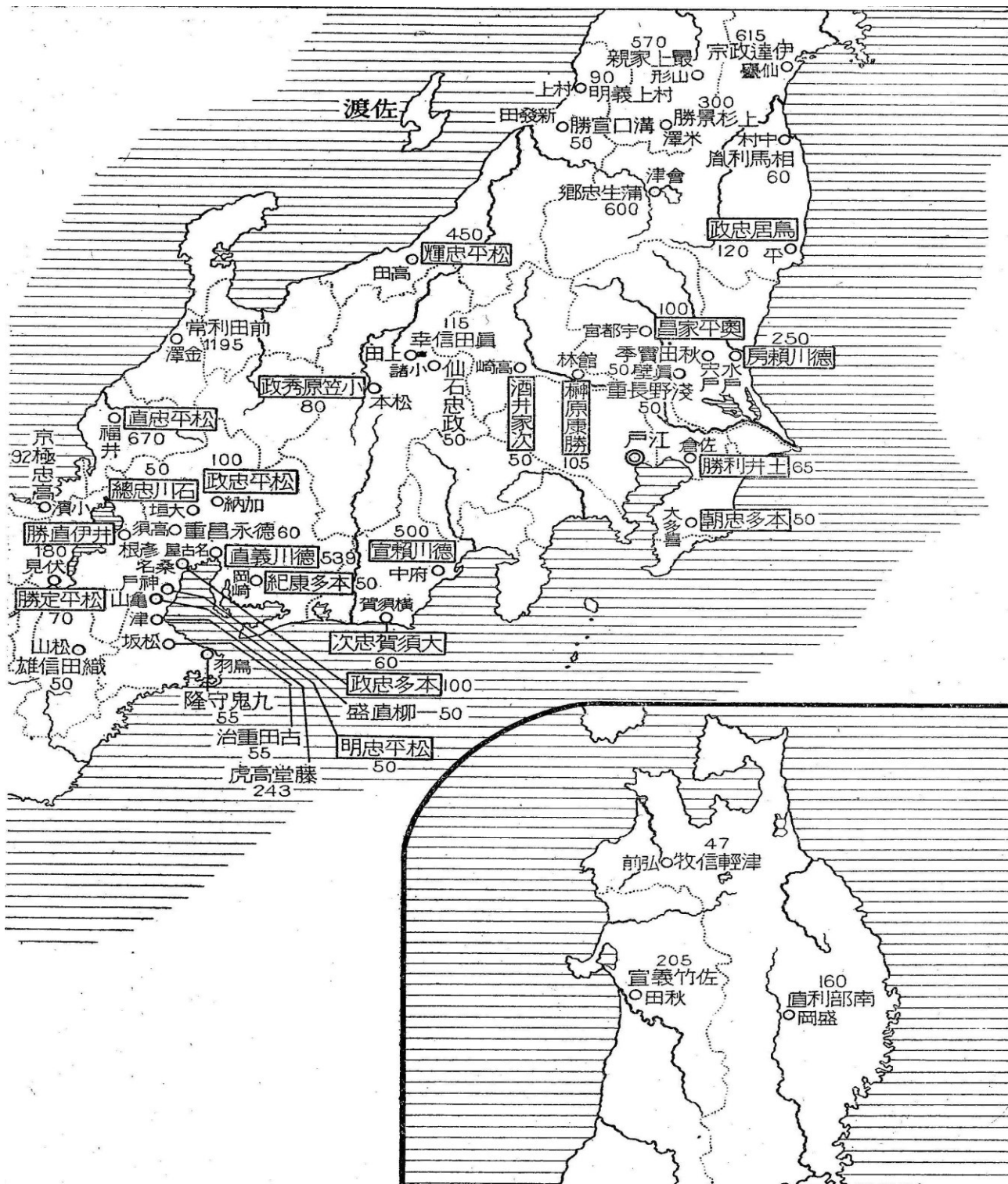
慶長十九年諸大名配置の圖

(石千位單)高石は字數 名大様外は他其 名大代譜及藩親は□
(上以石万五)



島津、毛利、黒田、池田、前田、浅野、加藤、福島、蜂須賀、生駒、伊達、細川らはその重なるものでしたが、ついに 1 人として大阪に身方する大名は無かった。返辞すらなかった。すでに時代が移って、全く徳川氏の天下となっていたために、永く子孫の幸福を思えば、将軍家に忠義を尽くすが得策と考へたからでもあったろうが、1 つは、前にも述べたように、度重なる城普請や何かで、家康のためにすっかり疲弊させられて、これに反抗する力も勇氣も無くなっていたからです。

尤も、この時にはもう加藤清正、浅野長政、同 幸長、池田輝政、堀尾吉晴らのような、豊臣家に対して最も深く忠誠をつくした諸将はみな世を去っていた。



わけてもきよまさ さちなが清正と幸長とは、慶長 16 年 3 月、京都に来ていた家康が、強いて秀頼を上京させて、二条城で対面した時に、秀頼のお供をして行き、万一の事があればと、きよまさ かたな めくぎ さちなが「清正は刀の目釘を守り見、幸長は四方に目遣いして覚悟の体」であったと伝えられるくらいまでに、秀頼の身の上を案じ思っていたのですから、せめてこの 2 人だけでも生きていたならば、大いに心強かったでしょうに。きよまさ 清正はその年の 6 月、53 才で卒し、さちなが 幸長は翌々 18 年 8 月、38 才で卒しました。

大阪方の兵力

こうして大名で身方する者は 1 人もいなかったが、これに反して、浪人の入城した者は非常に多かつ

第4話 豊臣氏の滅亡

さなだゆきむら ちょうそ が べもりちか せんごくそうや もうりかつなが おおたにだいがく よしたか ますだもりつぐ ながもり
 た。 真田幸村、長曾我部盛親、仙石宗也、毛利勝永、大谷大学(吉隆の子)、増田盛次(長盛の子)、
 あかしもりしげ あさいながふさ ごとうもつぐ ばんなおゆき おも
 明石守重、浅井長房、後藤基次、塙直之らはその重なるものでしたが、この外、関が原の戦いに敗れた
 西軍の大名や、その子弟や、その家臣らが殊に多かった。 これに、大阪譜代の 士 として、大野治長、
 はるふさ どうけん おだゆうらく よりなが ななてく かしら およ きむらしげなり わたなべただす すすきだかねすけ
 治房、道犬の3兄弟、織田有楽、頼長の父子、七手組みの頭、及び木村重成、渡邊 糺、薄田兼相ら
 そうせいおよ こも
 を合わせて、総勢凡そ 90,000 の将卒が城中に籠ったのです。

一方、家康は 10 月 23 日に京都の二条城に入り、秀忠は 11 月 11 日に伏見に着いたが、西国大名の大
 阪に來たり会するのを待つために、日を送って、いよいよ 11 月 15 日に大阪に向った。 家康は奈良から法
 隆寺を経て住吉に進み、秀忠は枚方を経て平野に陣した。

東軍の攻め囲み

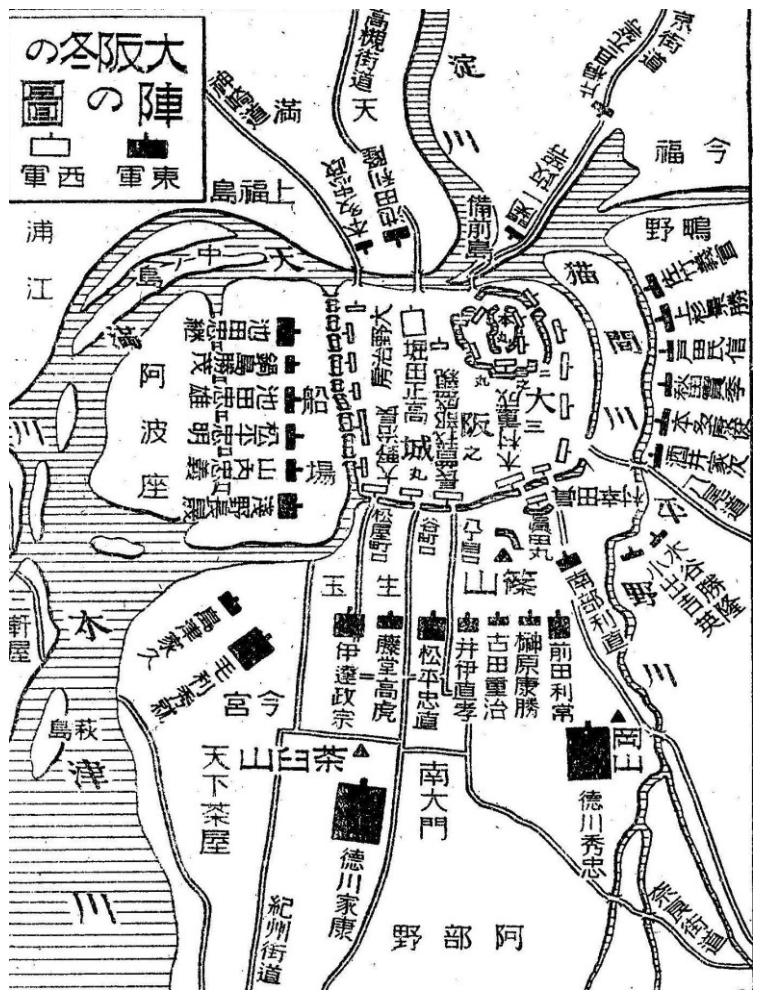
斯うして東軍はほうぼうに向かい城を築いて、総勢 200,000 余を以って 4 面から攻撃したが、もとより金城鉄壁の大阪城に、真田、後藤らの智将、勇将がこもったので、激戦はしばしば起きたが、はかばかしい効果は無かった。 12 月 4 日、秀忠は陣を城南の岡山に進め、家康は同じく 6 日に本陣をその西の茶臼山に移して、更に一層の肉薄を試みたが、やはり城は容易に落ちそうにもなかった。

のみならず、却って東軍のほうが多死傷が多く、不利の日のみがつづいたので、家康は、ぐずぐずして、もし身方の大名の中から叛応する者でも出たら、それこそ大変だと、急に例の奥の手を出して、一時ともかく和睦しようとした。

家康の講和策

即ち、一方、片桐且元を召し寄せ、これに大砲を授けて、秀頼および淀君の普段住んでいるところに向けて、猛烈に射撃させて、大いにおどしつけると共に、一方で、使いをしきりに城中に入れて、百方和睦を勧めたのです。 この大軍に包囲されては、たとえ一時は有利に見えても、結局は兵糧が尽きて餓死するに決まっているが、今のうちに和睦すれば、豊臣氏のために幾らでも有利な条件が結び得られると家康は説いたのです。

講和の成立とその条件



第4話 豊臣氏の滅亡

第1に織田有楽がこれに応じ、大野治長もまた、1人の大名も身方する者のないのは、家康がまだ生きていたためであるので、今は和して更に時機の来るのを待とうとして、これに賛成した。秀頼および新参の各将らは、極力これに反対したが、肝心の淀君が、ある日、その居間の次の間に砲弾が中って、その座に居合わせた侍女を殺したのを見てから急に怖気がついて、しきりに秀頼に和睦を迫った。秀頼も止むを得ずしてこれを承諾した。その条件は、

一、秀頼の居城は前々の通り、領地も無論同前の事。

一、召抱えた諸浪人について徳川家は何の異議もいわない事。

一、諸浪人を召抱えたについては、追ってこれの扶持を考慮する事。

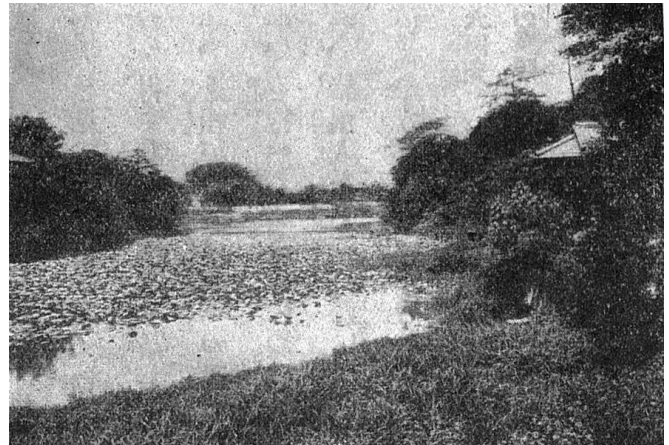
というような頗る漠然とした、しかし非常に寛大なもので、12月21日に徳川家は誓書を豊臣家に渡し、その翌23日に秀頼は家康に誓書を渡した。

大阪冬の陣

これには、「秀頼は両御所に対して、今後、謀反の野心など抱かない事」という意味が書かれていた。この戦いは慶長19年11月に始まって、12月に終わったので、世に大阪冬の陣といっている。

木村重成の血判取り

この誓書の交換の時に、大阪方の使いに立ったのは木村重成でしたが、彼はこの時22才の青年でありながら、堂々と茶臼山の家康の本陣に乗り込んで、敵の諸将の列座した中で、秀頼の口上を述べ、家康から渡された誓書に、判だけが有って血判のないのを見ると、「こうしてお使いを承った以上は、なにとぞぢきぢきのご血判を願い奉る」といった。



大阪 天王寺公園内 茶臼山

家康が「年を取ると、つい物を忘れがちで、血判の事も忘れていた」などと言って、ごまかそうとしたが、其の手に乗らずに、鮮やかな血判を取って悠々と引き上げたので、家康を始め並び居る将士は、いづれもそのあっぱれな振舞いに感じあつたと伝えられる。

口約束の総壕埋め立て

さて、こうして和睦が全く出来た時に、家康はほんの付けたりのようにして次の様に言い出した。「今度の和睦は、すべて大阪方の都合のいいように取り決めたが、これでは、我々父子が大軍を率いて、はるばる出馬したしるしが何もない、幸い和睦も出来たことだから、いわば不用に等しい大阪城の総壕を埋めて、両家和親の実を示して欲しい。但し、これを埋める手数までかけるのは気の毒だから、その人夫はこちらから出そう。その指図もこちらで引き受けよう」と。

総壕とは外堀の事ですが、第一、家康の言い方が全く何でもなしのように軽かったので、淀君はた

第4話 豊臣氏の滅亡

いした事でもないと思ったのか、深く考えずにこれに同意した。

ところが、誓書にも書かなかったこの口約束が、実は大変な事だったのです。家康が数年前から密かに胸にいだいて、乗ずる機会を狙っていた目的そのものだったのです。即ち、天下の名城である大阪城の要害を取り去って、ただの平城にする事だったのです。

こうして家康は、誓書交換の翌日即ち 12月23日から本多正純を奉行として総掘埋め立ての工事に着手させ、その監督には秀忠を当らせた。そして自分は25日に大阪を去って京都の二条城に赴いた。

本多正純の空とぼけ

正純は徳川譜代の大名の士卒数万人を指揮して、櫓といわず、塀といわず、ことごとくこれを打ち壊して、堀の中に投げ入れさせた上に、石垣をも崩し込ませたので、幾日もたたずに外堀は平地となった。するとなおも進んで二の郭に入り、中仕切りの堀をも埋め立て始めたので、大野治長らが大いに驚き、急ぎ人をやって、これを差し止めさせると、工事をしている者らは、「大御所の仰せとのことで、本多正純の指図である。異議があるならば奉行の正純に交渉して貰いましょう。われわれは奉行の指図を受けられるもので、あなた方の指図に従うわけには行かない」という。

そこで急ぎ正純に面会しようとする、生憎病気で住吉の旅宿に引き籠もっているとして会おうとしない。そうこうする間に、数万の人数が昼夜をかけての事ですので、第二の堀もほとんど埋め立てられたが、そのころになって正純は出てきて、「我々はただ堀を埋めいと仰せを受けたのだが、では承りちがいであったかも知れない。今一度よく伺った上でご返事しよう」と言った。

そして、やがて工事もほぼ済んだころに、「やはり、それがしの承り違いであった。外濠だけの事だったのに、今更何のお詫びの申し上げようもない、この上は引き籠って、大御所のご沙汰を待つ事にしよう」とさも面目なげにいて、人夫らをひきまとめて、さっさと伏見に引き上げた。

家康のごまかし

そこで、大阪では家康のところに使いをやって、正純の専横を訴えると、家康は驚いた風を装い、「いやそれは怪しからぬ、飛んでもない事だ。予においても、秀頼母子に対して、何とも申し訳が無い、正純には切腹申し付けようと思うが、折角和睦のめでたい折に、1人でも人を殺すのは縁起がよくない、枉げて予に免じて許して貰おう。それに、こう和睦が出来た上は、今更城の濠のと、要害などは要らぬ訳だし、まあまあ辛抱して貰うことにしよう」と、所謂不得要領な返事をしてとうとうごまかした。

大阪方では初めて家康の悪巧みを知って大いに憤ったが、今更どうしようも無かったので、ただ徒に悲憤を重ねていた。淀君などは泣いて口惜しがったと伝えられている。

ところが、家康の圧迫はこれだけで終わらなかった。

またもや無理難題

彼は二条城でめでたく慶長20年を迎えて、正月3日に京都を立って駿府に向ったが、わざと道中に日を費やして、正月19日に大阪を引き上げた秀忠が、同月28日に京都を立って江戸に向ったのと途中で

第4話 豊臣氏の滅亡

待ち合わせて、大阪の様子を聴き取った。安心して2月14日に駿府に帰り、秀忠は翌々16日に江戸に着いたが、こうして大阪城の要害が、すでに全く失われたのを知った家康は、またもや豊臣氏に向って無理難題を言いかけた。

「大和か伊勢か、両国の間で領地を与えるから、大阪を速やかに明け渡されよ。もしそれを不承知で、今のまま大阪にいようというなら、召抱えた浪人共を悉く放逐して、もとの家臣だけにしなさい」というのがそれで、3月に入って発せられた要求である。

召抱えた浪人に対して異議の無い事は、和睦の誓書にも明らかに記して、その扶持をさえ考慮しようと誓っておきながら、まるで忘れたように、知らぬ顔をしての要求です。況して国替えの如きは、秀頼にしても、淀君にしても、もとより承知しようのない筈のことでした。所謂出来ない相談ですが、家康は十分にそれを承知の上で持ち出したのです。つまり開戦の口実にしようとしたのに過ぎないのです。

大阪方の再挙

一方、大阪方では、重ね重ねの家康の不信を怒って、ついに再挙を図ったが、すでに城は、濠も無ければ、外郭も二の郭もなく、ただ本丸だけが、裸城として浅猿ましく聳えているのみです。いかなる名将勇士が籠っても、とても勝てそうな望みはなかった。それで、秀頼を始め一同必死の籠城を覚悟したが、ともかくもとて、急いで、さきに埋められた濠址を幾尺（一尺は30cm）か掘り起こしたり、もとの塀址などには柵を設けたりして、防御の用意を始めた。

家康父子の出陣

さて、大阪城で再び敵対の企てがあるという事が、間もなく京都の所司代板倉勝重から駿府に告知知らされると、家康は、もとよりこうなるように仕向けた事ですから、心ひそかにこれを喜びながら、江戸の秀忠に出陣の命令を伝えておいて、4月4日に駿府を出発し、18日に京都に着いて二条城に入った。秀忠は同月10日に江戸を発して21日に伏見に着いた。

大阪夏の陣

とはいえ、今度は去年の冬とは全くその陣容が違っていた。率いた軍勢も少なかったが、外様大名は僅かに藤堂、伊達らの2,3氏だけで、他はすべて譜代の家臣でした。

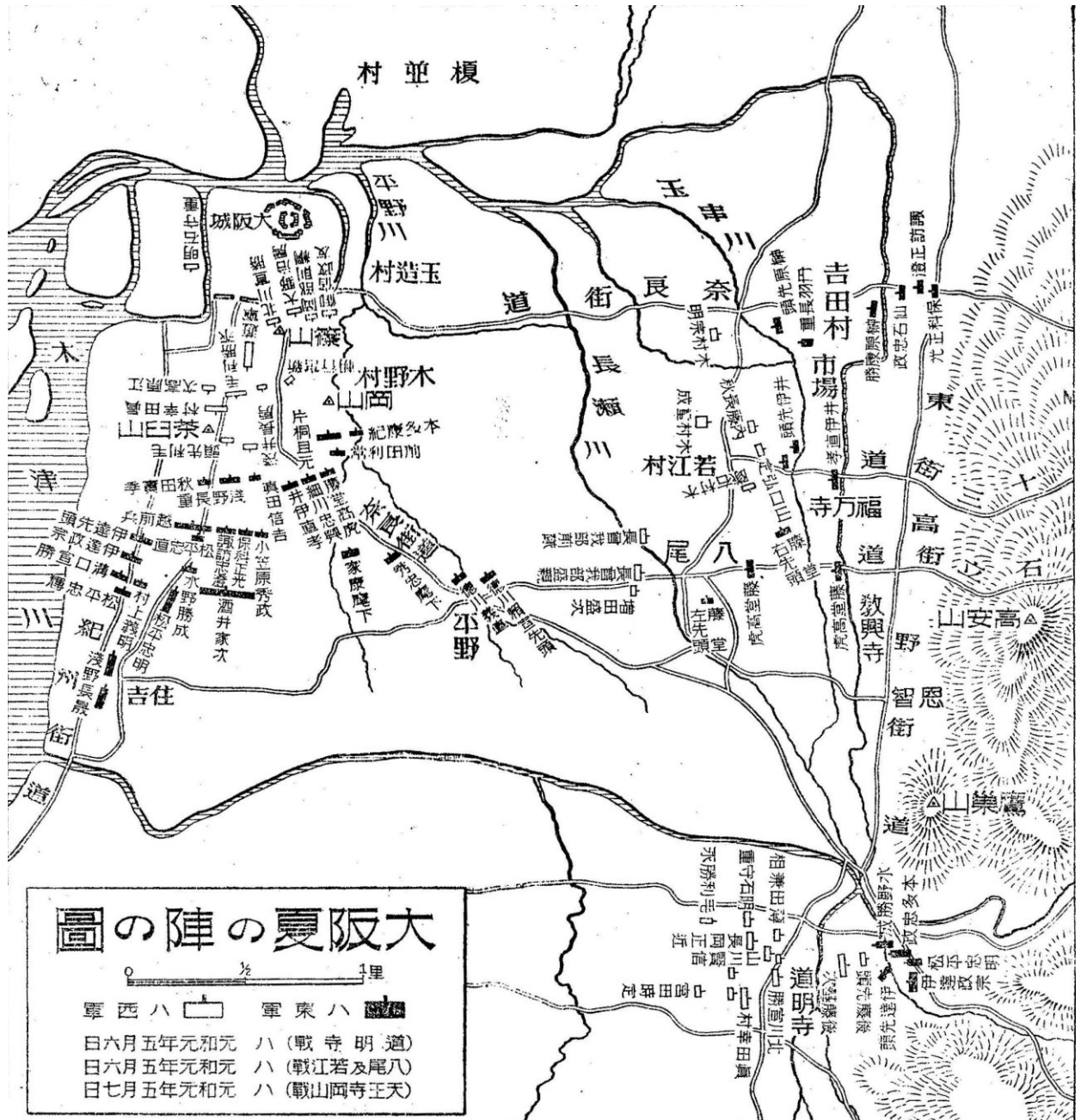
すでに防御力のない大阪城は、これを一揉みにつぶすのに、なんの手間ひまも要らぬと思ったからでしょう。総勢凡そ150,000を2つに分け、1軍は大和口から1軍は河内から大阪に向わせた。両軍の先鋒が京都を出発したのは4月26日で、家康及び秀忠は、遅れて5月5日に京都と伏見を立った。

大阪方の迎撃

一方、大阪方ではすでに決死の覚悟を極めたとはいえ、城には防御力が無かったので、遠く城外に東軍を迎え撃って、雌雄を決しようとした。5月6日、真田幸村、後藤基次、薄田兼相らは河内の道明寺（南河内郡道明寺村、大阪の東南約16km）で大和口から来た東軍の水野勝重、本多忠政、伊達政宗ら

第4話 豊臣氏の滅亡

を^{むか}迎え撃ち、木村^{きむらしげなり}重成は河内の若江（中河内郡若江村、大阪の東方約12km）に井伊^{わかえ}直孝を、長^{いいなおたか}曾^{ちようそ}我部^{かべ}もりちか、増田^{ますだ}もりつぐ盛次^{やお}らは八尾（河内郡八尾町、若江の南方約4km）に藤堂^{とうどうたか}高虎^{とら}を迎え撃った。



いづれも^{げきせん}激戦で、その戦^{せんきよう}況からいえば、むしろ東軍のほう^{おうえん}がしばしば敗れ、藤堂軍の如きは、老臣の多くを失ったほどでしたが、いかんせん、大阪方には他に^{ごとうもつぐ}応援があるわけではなかったの^{しだいしだい}で、後藤^{ごとうもつぐ}基次、薄田^{うすきた}かねすけ兼相、木村^{きむらしげなり}重成、増田^{ますだ}もりつぐ盛次らが戦死すると、その後^{あと}を継ぐべき大将が無かったので、次第々々に押されて、ついに大勢は東軍の勝利に帰した。大阪方は城中に引き上げた。

翌^よく7日、東軍は、勝^{かち}に乗じて一挙に城を^{おとし}陥れようと、しきりに南方から大阪に向って進んだ。家康、秀忠は大阪城の東南およそ8kmの平野^{さいはい}で采配^{ふる}を揮っていた。

これに対して、城方では真田^{さなだ}幸村、毛利^{もうり}勝永、浅井^{あさい}長房、明石^{あかし}守重らが、兵^つを尽くして城を出て、茶臼山、岡山、その他に陣取っている東軍を迎え撃った。非常な^{げきせん}激戦で、一時は到るところで東軍のほう^{くせん}が苦戦した。わけても、幸村^{ゆきむら}が家康の本陣に迫った時は、家康の身^{あぶ}さえ危ないくらいであったと伝えられる。

第4話 豊臣氏の滅亡

真田幸村の最後の計略

この時、幸村は秀頼に出陣させて、最後の戦いに気持ちよく勝敗を決しようという計略を立てたのですが、老獪な家康に例の悪智恵を出されて、ついにだめになった話がある。前にもたびたび述べたように、太閤恩顧の諸大名は、ことごとく家康父子に対して二心のないことを誓っているのです、すでに全く徳川氏の臣下になってしまっているが、それでも、もし秀頼が自ら城外に打って出たならば、さすがに太閤の御跡目の方であるので、たとえば藤堂、伊達などという連中にしても、よもや正面から打ってはかかるまい、恐らくは道を開いて、秀頼の軍勢を易々と家康の旗本へ打ちかからせるであろう、そうなればメたものだ、というのが幸村の考えであった。

しかし同時に家康の恐れていたのもこの一事であった。若しそうなれば、必死を極めた一軍が、所謂死に物狂いに働くのですから、すでに疲れ果てた徳川の旗本勢が、果たしてこれに勝てるかどうかかわからない、万一負けそうにでもなったら、それこそどこから裏切り者が出ないともはかられない。

家康は大いにこれを心配して、いろいろと考えて、ついに、去年和睦の時に人質として取って置いた大野治長の子の治徳に命じて、急ぎ父治長の許に一書を送らせた。

家康の悪智恵

ここでは、城方の大将の中には、秀頼を城から外に出してこれを関東へ引き渡して、それを手柄に自分らの助命を乞おうと企んでいる者のある事が、大阪方からの内通によって分かったが、万一そういう事になれば、大御所にも、将軍にも、秀頼を助けたくとも助けられなくなるから、秀頼にはどこまでも城中にいて、そういう者共の言う事などは聞き入れないようになさるがよい、畢竟、今度の戦いも、浪人共の申し勧めたことで、秀頼の本意でないことは大御所がもとより承知の事であるので、そちらがおとなしくしていれば、決して生害などさせるようなことをなさる筈がない、という意味を告げさせたものです。

ちょうど城中では、今將に秀頼が出馬しようとしているところにこの書面が届いたので、治長は半信半疑で惑っていると、幸村からは、機を失ってはならない、疾く疾くご出馬あれ、と頻りに催促して来る。けれども、治長らは、ただ秀頼母子の助命という事に心を奪われて、いつまでもぐずぐずしていた。

さすがは幸村、かねての約束をたがえて秀頼の出馬がないのは、自分を疑うと見ると、子の助命を人質として城中にやって、猶も出馬を促したが、この時はもう、治長らは全く家康の術中に落ちて、秀頼の出馬をとどめ、助命を乞う事に決した後であったので、幸村もこの上は力及ばずと、憤然として、いさぎよく家康の旗本に切り込んで乱軍の中に討ち死にした。時に年は46才でした。

豊臣氏の滅亡

こうして、城方が総敗軍になると、城中では関東から千姫につけておいた台所頭が東軍に内通して、火を城に放ったので、忽ち炎々と燃え上がった。秀頼母子は難を避けて糶倉の中に移った。治長らは先の家康の言葉を真実と思っていたので、千姫を城外に抜け出させて、秀頼親子の助命を乞はせた。

ところが、家康はもとよりこれを助ける積もりは無かったので、何分にも将軍(秀忠)が承知して呉れ

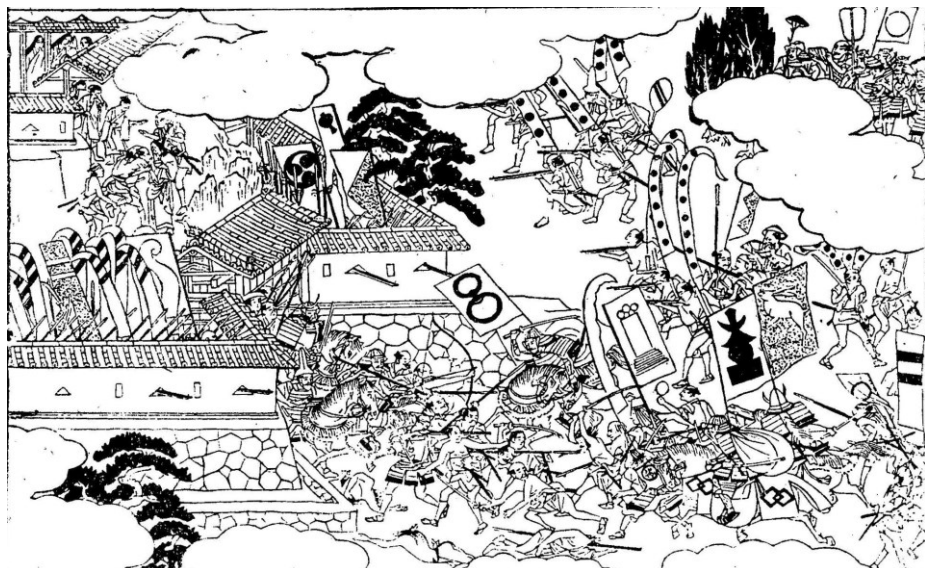
第4話 豊臣氏の滅亡

ないから、いかんとも仕方がないと言いついて、翌8日の朝になると、秀頼らの籠った倉庫を目がけて一斉に砲撃させた。

ここに於いて秀頼母子を始め、大野治長、毛利勝永、真田大助、大蔵卿らの20余人は皆自殺して、豊臣氏はついに亡びた。

時に秀頼は23才でした。実に慶長20年(7月に改元して元和元年)5月8日です。

この戦いは4月に起こって5月に及んだので、世に大阪夏の陣といっています。



大阪夏の陣 (落城前の大阪城門の内外の様子)

戦後の始末

なお、家康の豊臣氏に対する態度が、いかにも無情で、残酷で、醜悪なものであったかは、この戦後の始末において一層よく窺われる。この落城の際に、秀頼の子の国松丸は、8才で、乳母と共に伏見の農家に隠れていたが、捕えられて、京都の市中を車にのせて引きわたされて、六條河原で殺された。もう一人の7歳の女の子は、命だけは助けられたが、鎌倉の東慶寺の尼とされた。長曾我部盛親は山城の八幡で捕えられ、六条河原で斬られて、三条河原で梟首(さらしくび)され、大野道犬は東山の大仏辺りで捕えられ、和泉の堺の町で火焙りにされた。

この外、落人共の搜索もきびしく、捕えては片っ端からこれを斬った。一時は京都から伏見への街道に沿って、棚を18列も造って、その1つ1つに1,000以上の首を梟したと伝えられる。

また、大野治長、仙石宗也、後藤基次らのような大将株の子供らを皆殺した。

のみならず、家康は、京都の東山の豊国大明神の社殿を毀し、特に朝廷に奏してその神号を削り、且つ阿弥陀峰の秀吉の墓に建てた塔をも取り去って、これを方広寺の一隅に移した。豊臣氏の血統を根絶やしにただけではまだ満足出来なくて、諸大名に故太閤を想う念をも絶たせようとしたのでしよう。

片桐且元の末路

もう1つ序に述べておきたいのは、片桐且元のその後です。彼は最後まで家康に従って、その機嫌を損じないのが秀頼の安全を保つ所以だと想っていたようだが、その予想とちがって、豊臣氏が跡方もなく滅ぼされてしまったのを見て、始めて自分の愚を悟り、その日から自ら食を断って、5月28日、即ち大阪落城後20日にして死んだ。年は62才でした。

また、千姫は落城の時に19才でしたが、これも自害もしなければ尼にもならず、後、本多忠政の子の忠刻の妻となって、一生を送った。

第4話 豊臣氏の滅亡

(第4話 豊臣氏の滅亡 終わり。 次は前頁に戻り、 第5話 江戸幕府の初政)